

働く理由を求めて

富田 文子

(元福祉学科教員)

大学教員を目指した理由

私は、30歳になる2016年度に立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科の助教に着任しました。人生の節目をスタートにして、退職するまでの3年間は、社会人としてのどの年よりも勢い良く駆け抜けたと実感しています。それは、全ての教職員の皆様、そして学生の皆さんからの声援をいただき、多くの山と谷を乗り越えて、健脚を手に入れることができた結果です。

立教大学に着任する以前、私は地方公務員の福祉職として、生活保護行政及び障害福祉行政に従事してきました。3年間の生活保護のケースワーカーと公務と並行して通った大学院修士課程での研究を経て、入庁時から希望していた障害者の就労支援業務を担うことができました。しかし、在職中に後輩が異動してくることはなく、就労支援の重要性や面白さを分かち合う若手職員がいませんでした。そのように、研究した内容を実践していく過程で、障害福祉、特に就労支援の知識や技術を学び、障害者・家族・企業・社会等にある多様な課題を理解でき、現場に携われる人材の育成が必要であると強く感じ始めました。

また、地方公務員は定期的な異動があり、異なる福祉分野の業務に携わることとなります。異動年限を意識し始めた頃、地方公務員としてのその後の目標や従事したい業務を見出すことができずにいました。そこで、「公務ではない目標に向かって歩き出してみよう」と考え、大学教員を志した矢先に、立教大学での教育研究職というステップを得ることができました。そして、福祉現場を離れてでも行く価値ある場所という大きな希望を抱いて、一歩踏み出しました。

教育職とは何なのか

着任後1週間、オリエンテーションを学生と一緒に受けながら、喜びを感じる反面、「とても凄い場所に来てしまったのかもしれない」という不安が沸いてきました。それまで、講義を行った経験はなかったため、学生に伝えたいことや教えたことのあるものの、どのように伝えたら伝わるのか、何を題材にするのが効果的なのかを考え、連続

性のある講義として内容を展開させていくことの壁に当たってしまいました。そういったときに、実習教育室の先生方が、私にとっての「教育職としての先生」になってくださいました。先生という存在が、こんなにも安心できることを実感したと同時に、学生にとって、私自身がそのような立場になっていかなければならないことを覚悟しました。

そして、もがきながらも、社会福祉士としての私自身の反省を踏まえて、学生に福祉現場における実践と理論を余すことなく伝えることに全力を投じました。学生と共に考え学び合う中で、福祉ニーズを必要とする対象者の困難さを正しく理解しようと努め、真摯に向き合う努力のできるような素養を引き出す教育が、福祉現場にも還元できることを少しずつ理解するに至りました。

先日、昨年度に福祉実習を担当していた学生が「特例子会社の支援員に内定しました」と連絡をくれました。特例子会社とは、障害のある人のために配慮された一般企業（株式会社）を指します。私の大学卒業時にはなかった、支援者ながら企業において障害のある人と共に働くという進路があることにも驚きましたが、何より大学卒業時の職業としてその選択をする学生が現れたことに、こういった人材を育成できる教育の重責を感じずにはいられませんでした。しかし、言葉では言い表せない程の嬉しさがありました。

研究職とは何なのか

大学に来たことで、支援する対象が見えにくくなってしまったことも、私にとって大きな悩みとなりました。それまでは、主に、障害のある人と労働者同士として、企業就労に向けた様々な訓練をしながら、共に悩み支え合ってきました。また、職員同士もチームとして職業評価や企業開拓、地域連携といった支援を重ねてきました。しかし、研究職は個人として研究成果を出したり社会貢献をしたりすることで、その役割を獲得していくこととなります。障害のある人に対する直接的支援から、間接的支援になったことで、誰のためにどのように役立っているのかについて、深い霧の中に迷い込んで、目的を見失ってしまったように感じる日々が続きました。

また、障害のある人は、労働市場や景気動向に左右されやすく、企業において雇用の人工弁になりやすい存在です。有益な人材として活用されにくいことがあり、その活用の仕方がわかりにくいことが原因だと思いますが、雇用の更新がされないことがあります。私は、無期雇用の公務員から有期雇用である助教として働くことで、十分に理解できていなかった境遇を経験し、働くためには安心と安定が必要であると実感しました。同時に、今の自分が1年後、5年後、未来の自分を作り出すこと、その時に後悔しないために今何をするのかを問われていることに葛藤を抱きました。

そのような中でも、2年目から前職の大田区との共同研究を開始し、2017年度にはコ

コミュニティ福祉学部地域連携・協働プロジェクトの助成を受けて『障がいのある方の支援者向け就労支援施設ガイド大田区ジョブブック』を開発することで、障害のある人に直接役立つ成果ができました。また、2018年度には、コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金企画研究プロジェクトの助成で、「視覚障害者に対する福祉分野での就労支援技法の獲得に関する調査研究」を行い、長らく見過ごされている地域における視覚障害者支援の課題を探ることに挑みました。いずれの研究についても、コミュニティ福祉学部紀要に執筆することもでき、先生方の背中を追いながら、福祉現場と研究とを連動・接合させていくことで、自分の役割が鮮明になり、研究職のスタートラインに立つことができたかと振り返っています。

まなびあう

福祉実習教育と併せて挑戦したのは、コミュニティ福祉学会「まなびあい」において学生発表をサポートしたことです。一人ひとりの学びに留まらず、社会福祉を担う集団として、障害福祉を考える機会を得られたことは、苦労はありましたが、非常に実り多い素晴らしい時間でした。2017年度は5人の学生と「障害支援と障害者支援—その人らしさと地域生活の在り方—」について考え、2018年度には6人の学生とともに「支援者の視点から各ライフステージにおける知的障害者への支援の在り方を考える」を探求しました。結論を出すまで議論を尽くしたことは、学生・教員という立場を超えて、専門職同士の真剣な研究そのものでした。その結果、「誰と、どの地域・街で、どのように暮らしていくのかを選ぶことができる当たり前こそが幸せである」という、社会福祉の原理を改めて心に刻むことができました。

現在、社会福祉士や精神保健福祉士が一層求められる世界になりつつあります。しかし、本来は、住民一人ひとりが社会全体の福祉を理解していけることが重要であり、学生とはそれを考え続けられる関係を継続していきたいと強く願っています。今後の私にとって、それが働く理由になっていくと思っています。

まとめに代えて

昨年度で退職いたしました。2019年度は卒業研究や相談援助演習、福祉ワークショップといった福祉実習教育の要である演習科目を担当させていただいております。これは一重に、福祉学科の先生方の寛大なご高配の賜物です。それによって、4年間で共に過ごしてくれた学生がいます。彼女は、私にとっての学びの師になりました。

最後になりますが、コミュニティ福祉学部20周年記念誌編集委員を担うことができたことは、“コミ福”の20年間の歴史において、その一員になれたと実感できた何よりの

職務でした。今後ますますコミュニティ福祉学部が繁栄していくことを祈念しております。

未熟ながら、3年間育てていただきました全ての先生方、支えてくださった職員の皆様、現場実習にご協力くださいました支援機関の皆様、共に学びを深めてくれた卒業生・在学生の皆さんに心より感謝申し上げます。大変お世話になりました、ありがとうございました。